

菰萱道心説話と菰萱関

現在坂本区に所在する関屋の地名は、昔この付近に関所があったことに由来します。これを菰萱関といい、現在旧道沿いに「菰萱関跡」の碑が建てられています。この関所に残された説話が菰萱道心の話です。

説話の内容は以下のとおりです。道心は俗名を加藤繁氏といい、九州の大領主でした。しかし領地や妻子を捨て、高野山に出家し、菰萱道心と名乗ります。彼の息子である石堂丸は、父を訪ねて高野山に行きます。しかし、出家の身である道心は会うことを拒み、その後石堂丸も父を追って出家してしまうのです。

この説話は謡曲・説経等の題材として取り上げられた有名な話です。しかし、その内容には少なからず異同があります。ここでは道心についてみてみましょう。

まず、謡曲「菰萱」ですが、ここでは道心は「筑前の人」「菰萱殿」としてでてきます。この「菰萱」という名については、高野山菰萱堂との関係が指摘されています。寛永8年（1603）の説経「かるかや」には「筑

太宰府人物志

資料室だより①

前国「菰萱庄」の領主でかつ「松浦党の惣領」「九州6か国を知行」と見えます。この菰萱庄は存在が確認されない、創作上の地名であり、この段階までは直接的に菰萱関に結びつく話は見出せません。

享保20年（1735）豊竹座初演の浄瑠璃「菰萱桑心筑紫轢」は説経「かるかや」からとられた話ですが、道心は「筑前国」の人としかみえません。歌舞伎「菰萱道心筑紫轢」もほぼこの内容を踏襲しています。

そのような中、春帳子「菰萱道心行状記」は仏教説話で寛延2年（1749）に刊行されました。ここでは道心の父加藤繁昌について「博多守護職」で息子繁氏（道心）のために菰萱関に新造の亭を建てたとみえます。貝原益軒編纂の地誌「筑前国続風土記」が元禄16年（1703）藩主に献上されましたが、その中で菰萱道心説話に触れ、これを菰萱関の人とする記述があります。春帳子はこれに拠ったのかもしれませんが。菰萱関跡とこの菰萱道心説話を結びつけることで、地方色を打ちだそうとしたのでしょう。

市史資料室 朱雀信城